神宮徴古館の軌跡

ー博物館建築としての徴古館ー

Keywords
神宮徴古館　神宮農業館　片山東熊
神苑会　伊勢　博物館建築

AK12015　内山史崇

1. 研究背景と目的

明治を境に日本は大きな変貌と遂げた。道路や建物、衣服に到るまで、さまざまな物が西洋風へと変貌していった。こうした近代化が進む日本で、建築分野に最も影響を与えたのがジョサイア・コンドルの教え子の辰野金吾・片山東熊・曽禰達蔵・佐立七次郎の四人である。彼らは、後に第一世代と呼ばれ、その名を世界中に広めていく。

その中でも、今回宮廷建築家と呼ばれ、多くの近代建築を設計した片山東熊に焦点を当てていく。彼は、明治以降初の文化財で国宝に認定された事や宮内省内匠寮に従事し、多くの離宮・宮家に関与していた事などを指して、こう呼ばれるようになったと考えられている。

今回、調査で得た徴古館の資料を整理・分析し、徴古館が初期設計時から施工までの段階で、どのように変貌していったかを明確にし(1)、その中でも特に、木造の徴古館案との関係を探る(2)。且つ、当初の姿に復原し、博物館建築としての位置づけを行う事を目的とする(3)。

2. 研究方法

(1) 神宮徴古館・農業館が所蔵していた図面資料を整理・分析し図面の年代を明確にする。
(2) 図面の変貌した部分を見つけ、その原因や要因となった出来事を探る。
(3) 戦前の徴古館の図面を揃えて建築物の姿を3DCADで立ち上げ、博物館建築としての位置づけを行う。

3.資料調査

2011年に伊藤研究室で行った資料調査を基に、神宮徴古館に関する資料のみを選別し、分析していく。エクセルでリスト化することで資料整理を行い、年代・縮尺等を明確化する。資料は調査時、神宮徴古館にあり、神宮司廟の所有である。

表 1.　調査資料一覧

No.	項目	数量
1	神宮徴古館の資料	156枚
2	神宮徴古館・農業館の共通資料	27枚
3	その他資料	30枚
4	神苑会史料等	2冊

4.片山東熊について

図 1. 片山東熊

表 2. 片山東熊　経歴

	出来事
1854	山口県長州藩士の家に生まれる。
1864	奇兵隊に入隊。
1868	戊辰戦争に討幕軍として参加。
1873	*工学寮を受験し、入学を果たす。
1879	工学寮を卒業。その後工部省に務める。
1887	宮内省内匠寮の技師を任せられる。
1917	生涯を終える。

*工部大学校造家学科（現東京大学建築学科）

彼は、日本の宮廷建築の第一人者で、代表作として赤坂離宮や表慶館、京都博物館、奈良博物館、沼津御用邸、桃山御陵等がある。

5. 神宮徴古館概要

図 2. 現神宮徴古館

徴古館は、三重県伊勢市神田久志本町1754-1にある総合歴史博物館である。神宮神宮の清浄と美観を守り、博物館等の文化施設の開設を目的として神苑会により、日本最初の市立博物館として明治42年（1908）に創設された。

当初から総合歴史博物館を目指していたが、スケールが大きく、寄付金の低下によって資金不足に陥ったり、日露戦争が開戦したりといった問題が発生したため、規模を縮小し、同23年に徴古館の足がかりとして農業館が設立した。

その後徴古館は、昭和20年（1945）に第二次世界大戦の焼夷弾によって外壁以外を焼失。同28年に角南隆によって現在の形に復旧設計される。

研究指導：伊藤洋子 教授　　Uchiyama Fumitaka

6. 神苑会について

神苑会は、かつて明治19年(1886)から同44年までの間に存在した財団法人である。同19年に、内外宮神苑地の整備する事や、倉田山に神苑地を設け、歴史博物館を建設する事等を目的として発足した。

図 3.太田小三郎

太田小三郎(図3)が神宮の景観を整えようと、三重県に関係ある志士を集め結成した「十七日会」が起源となっており、自分らだけでは力が足りないと考えた彼らは国に助力を仰いだ。その後、有栖川宮熾仁親王を総裁、吉井友美を会頭とし「神苑会」となった。同44年には、目的が果たされたため解散した。

7.神宮徴古館建設過程と変換

7.1.神宮徴古館となるまで

神宮徴古館は元々「歴史博物館」という名称であった。明治22年(1889)まで、伊勢神宮の宮司を仮会頭とし、三重県に関連のある人物が運営していたが、同22年に東京事務所が設立されると、これを境に土方久元・佐野常民・渋沢栄一などの国に従事する人物らが神苑会に所属し、東京事務所に計画の決定権が移る。そのため国家的要素が多い神苑会となり、「神宮徴古館」という名称に変わったとされている。

7.2.木造徴古館までの過程と変換

当初は、神苑会発足の目的のとおり倉田山神苑地に総合歴史博物館である徴古館を設立しようと計画されていた。しかし、明治28年(1895)に農業館の建設地である外苑前神苑地に変更となった。

同30年5月の建築雑誌に神宮徴古館に関する記述があり神道式の建築で建築すること、外宮前神苑地に建設することが挙げられているため、同28年～同33年の間に計画されていた図面である(図4)。この設計は片山東熊・高山幸次郎らではなく、伊東忠太・木子清敬らが担当していた。しかし、同34年にこの案は断念される。

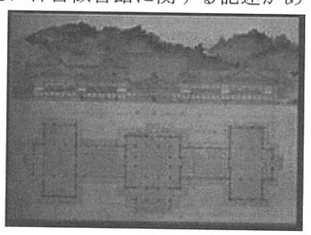

図 4. 木造徴古館案

同31年3月の神苑会史料に「寄付金不足により、倉田山を開拓することは難しいと判断し、農業館の門前西角より西方里道達する一帯の市街地を神宮徴古館の用地として買収した。」という記述があり、敷地変更の原因・変更理由が明らかとなった。

7.3. 耐火構造の徴古館までの過程と変換

明治31年(1898)、神苑会と密接な関係にあった宮内省に所属していた片山東熊らに耐火構造を目的として神宮徴古館の設計を嘱託する。

しかし、ここでひとつの矛盾が発生する。それは、木造徴古館とこの耐火構造の徴古館が計画されていた時期が重なっている点である。そのため当時、この二つの案が同時に存在していた。このような事が起きた原因は東京支部と三重支部との対立であると考えられる。同22年を境に東京支部が出来、決定権がそちらに移ったことで、対立が生まれてしまった。

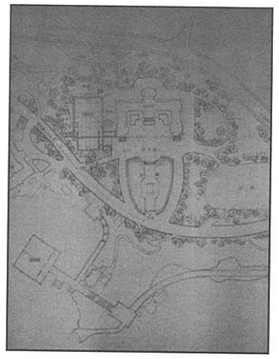

図 5. 徴古館配置図

加えて、この案の予定建設地は、倉田山神苑地(図5)であり、再び初期の場所に戻った。その事について神苑会史料にはこう記述してあった。

「農業館がある豊川町には、神宮徴古館・農業館・神苑会三重事務所を入れる土地がない。管理するにあたって、これらを離すことは得策ではないため、倉田山の買収が終わり次第、これらを同じ地に置くものとし、設計を進める。」

こうした結果、同33年11月に伊東忠太等らによる神道式の木造徴古館案ではなく、片山東熊らによる耐火構造の徴古館案が採用され、計画はすすめられていった。同31年に始まったこの案は、試行錯誤を繰り返したため、二度設計案が変更された。正確な年代は確認できていないが、神苑会史料から同38年頃と40年頃に設計案が変更されたと推測する。

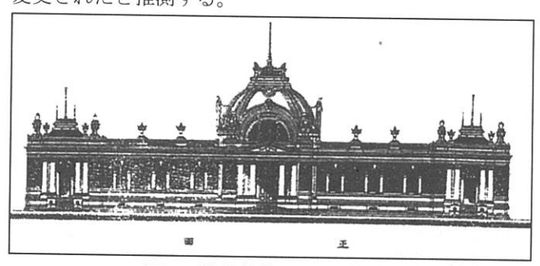

図 6. 徴古館第一案 正面

まず、同31年から38年頃まで計画されていたと考えられる案が図6である。この図は33年末に計画路線が決まる事や、明治38年に神苑図誌に掲載されていることから、明治33～38年の間に存在していた計画案だと推測できる。装飾を多用しており、同33年5月の建築雑誌に片山東熊が設計した表慶館と酷似していることから、彼が計画にかかわっていることが推測できる。

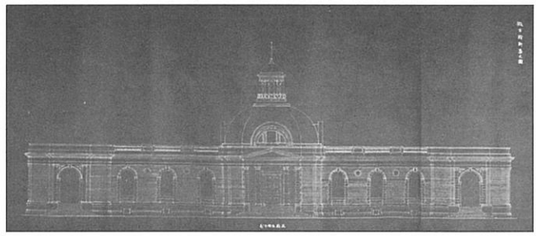

図 7. 徴古館第二案 正面

次の案は同38年頃から40年にかけて計画されていたとされる案である(図7)。図7の徴古館よりも竣工した徴古館に近しいデザインであるため、同38年以降の計画案であり、竣工した徴古館よりも前だと考えられる。中央昇降室が竣工したものとは異なるため、基礎工事が行われる以前の計画案である可能性があり、縄張りを行う同39年、もしくは外壁工事を行っている記述がある同41年まで存在した計画案であると思われる。

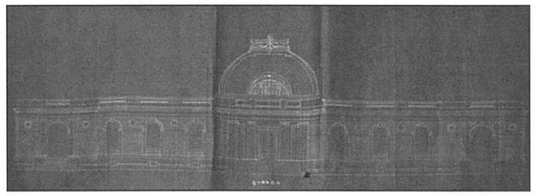

図 8. 徴古館最終案 正面

最後の案は同40年から42年にかけて計画された実際の徴古館である(図8)。図7の計画案からはランタン及び中央三角ペディメントを取り除いた計画で、中央ドームは4角形となった。

7. 4. 小結

明治19年(1886)から始まった「総合歴史博物館」を倉田山神苑地に建てるという目的は、名前が「神宮徴古館」に変更されながらも、22年という長い歳月をかけ達成された。

2つの案で争った結果、片山東熊らの耐火構造の案となった。しかし、倉田山を開拓する資金や今までの三重支部の働きが無駄になってしまったことに対する反対があるなか、実際どのように計画は変更され、建設がすすんでいったのかは明瞭な答えがでなかった。

8. 博物館建築

8. 1. 博物館建築とは

博物館の目的は、過去及び現在の物件を保存貯蓄する事であり、それが達成されるときに殖産興業を盛んにする、と考えられている。そして博物館建築を建てる際、重要となってくるものは「採光」と「構造及材料」である。採光は、大まかに分けて側照法と頭照法の2つに区分され、頭照法の方がより多くの光を受けることができる。構造については、耐火や湿気に対応していることが陳列品にも、建築構造にも必要となってくる。

8.2.片山東熊の博物館建築作品

片山東熊の博物館建築には、奈良国立博物館と京都国立博物館、表慶館に神宮徴古館がある。

奈良国立博物館(図9)の様式は、木骨煉瓦造平屋でモルタル外装を施した洋式のもので、清水組が施工した。また、耐震のため堅牢を目的とし、窓が少ない。そのため、光は屋上から採る工夫をしている。

図 9. 奈良国立博物館 写真

図 10. 京都国立博物館 写真

京都国立博物館(図10)は煉瓦と鉄、石材等を用いて建てられた西洋造である。「京都国立博物館百年史」に、京都美術協力員が拝観した際に火災は勿論、震災予防の工夫も行き届き、厚さ三尺という煉瓦の厚壁に多くの鉄杆を貫き崩壊を防ぐといった、眼に視えぬ処に力を費やしている。といった文章が載るほどの博物館建築に当時としては、格段の心くばりがなされている事が理解できる。

表慶館(図11)はギリシャ・ローマの様式を参酌し計画した美術館で、平面形状は十字型であり、中央に円形の広堂がある。二階の絵画は天窓採光、一階は側面からの採光としている。

図 11. 表慶館 写真

8.3.神宮徴古館の採光計画

神宮徴古館の採光計画としては天窓採光がなく、全て側窓からの採光である。中央講堂のみハイサイドライトを使用しているが、天窓ではない。徴古館は「歴史博物館」が元となって建設されたものであるため、「美術館」ではなく「博物館」として当初から計画されていたものである。そのため、「博物館」の設計を嘱託された片山東熊は天窓採光をやめ、側窓採光で均一的な計画を行ったものと思われる。

8.4.小結

徴古館は伊勢神宮の「歴史博物館」であり、美術品展示するために計画されたものではなく、完全に「博物館」であった。また、陳列は竣工後に計画がなされていることから、徴古館は博物館として建設され、それに合わせた採光をしたために、側窓のみとなったと読み取ることができる。

9.CADによる復原

9.1.使用図面リスト

表 3.使用図面題目リスト

神宮徴古館陳列棚配置図
屋根截断及平面
屋上窓堅樋避雷針位置
各窓・広間窓・陳列室窓・角家窓
角家截断
後部陳列室截断
後部平面
後面
後面妻
後面豫備室広間附内部截断・後面豫備室側通り内部截断
後面豫備室前面
後面豫備室平面
後面豫備室截断
広間・昇降室平面
広間窓外面・角家截断
広間天井臥
広間截断
左右昇降室前面
左右昇降室截断
小屋臥セ
正面
正面昇降室前面
前面
窓前面及側壁截断
側面
地形其他平面・地形其他截断
中央昇降口截断
中央昇降室前面
中央昇降室平面
中央昇降室截断・階段截断面
中央平面
中央截断
陳列室截断・中央昇降室側面
陳列室截断中央昇降室妻表面
唐戸・中央昇降室入口・左右昇降室入口
平面

神宮徴古館所蔵の図面史料より、以上合計36枚の資料を使用した。

9.2.パース

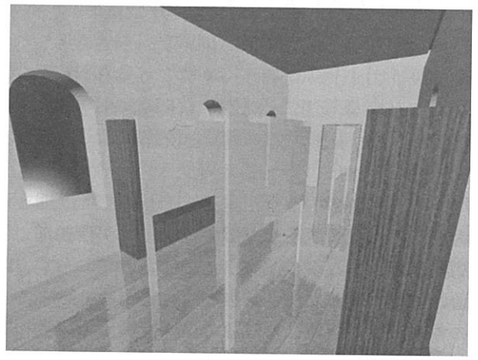

図 12.絵画室内観パース

10.まとめ

(1.2)神宮徴古館は、竣工までに三度案が変更されたと考えられ、その中でも東熊らの耐火構造の案は、忠太らの神道式の木造徴古館の対案として東京支部から提案された。国家的要素が高まった結果、東熊らの案が採用され、計画が進められた。

(3)徴古館には、絵画室はあるものの天窓ではなく、側窓での採光案をとっている。なぜなら徴古館は、博物館として作られ、竣工後に陳列案が考えられたからである。一方、徴古館以前に竣工した奈良・京都両国立博物館では、すでに天窓を採用しており、徴古館では図画の展示計画で工夫することになった。

国家的要素が高く、国立博物館的とされる徴古館であるが、展示計画ではこのような苦労があったとわかった。

参考文献

1) 2003年度大手前大学出版「片山東熊とその時代」
著：塩田昌弘

2) 2010年度日本建築学会関東支部研究報告集9052「片山東熊の遺した資料~はがき資料を追って~」 著：原正彦

3) 2011年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ9007「片山東熊の震災予防調査会における活動と建築作品について」
著：磯俣祐介

4) 2012年度芝浦工業大学修士論文「伊勢神宮神苑会の業績~神宮徴古館・農業館に関連して~」 著：磯俣祐介

5) 2012年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ9001「片山家辞令に関する研究~片山東熊の人物像を追って~」著：玉野将和

6) 1911年神苑会清算事務所「神苑会史料」著：藤井清司

7) 1913年神苑会清算事務所「神苑会史料補遺」著：藤井清司

8) 京都国立博物館HP
http://www.kyohaku.go.jp/jp/about/fac/seh_maingate.html

9) 奈良市観光協会公式ホームページ
http://narashikanko.or.jp/literature/coursel.html